



25.11. 8

昭和二十五年十月

農村婦人生活実態調査報告會記錄

婦人少年局婦人課

まえがき

目次

一、岩手県下田原郡田舎村	二頁
1. 村の概況	二頁
2. 婦人の生活意識	五頁
二、山形県東田川郡大和村	七頁
1. 村の概況	七頁
2. 婦人の生活意識	九頁
三、群馬県北甘楽郡横田村	一二頁
1. 村の概況	一二頁
2. 婦人の生活意識	一三頁
四、愛知県西春日井郡春日村	一六頁
1. 村の概況	一六頁
2. 婦人の生活意識	一七頁
五、岡山県瀬戸郡常盤村	二〇頁
1. 村の概況	二〇頁
2. 婦人の生活意識	二一頁

婦人調査では去る七月より八月にわたる期間により農村婦人生活実態調査を実施し、その感想報告会を九月九日課内において行つたが、この記録は、当日各調査班から報告されたものをまとめたものである。調査の結果については現在整理中で、追つて報告書を作成、発表の予定である。

農村婦人生活実態調査要綱

一 調査の目的

終戦後の一連の婦人解放はらびに農民解放政策によつて農村婦人の立場も法的には一応改められたのであるが、その実生活は新憲法施行後満四年を経た今日でもなお殆んど従化して見られる現状である。

この調査は農業の経営形態、農業地帯等を考慮して選出した次の五ヶ村において農村婦人の生活実態を調査し、農村婦人の労働状態及びその地位がそれとそれの経営形態及び村の社会構造あるいは家庭生活においていかに位置を占めているかを把握し、もつてその眞の解放と実質的は地位向上のための資料とするものである。

二 調査村及び調査期日

岩手県下閉伊郡野田村	(山間地帯)	八月十三日—八月十八日
山形県東田川郡大和村	(準作地帯)	八月五日—八月十日
群馬県北群馬郡野田村	(農林地帯)	七月十九日—七月二十三日
愛知県西春日井郡春日村	(農業地帯)	八月十八日—八月二十三日
岡山県都窪郡都窪村	(準作地帯)	八月二十五日—八月三十日

三 調査事項

- 一 調査地域の概観
村の沿革、地形、土地、人口及び産業、教育、文化等
- 二 村の社会構造及び家における婦人の地位
婦人の労働状態

家内における婦人の生活実態

3. 婦人の生活意識

四 調査方法

面接法による。

五 調査員

労働省婦人少年労働婦人課員、地方職員室職員、民間の社会学研究家等らびに現地の村役場職員、農業協同組合役員等を依頼

六 結果発表時期

昭和二十五年十二月の予定

七 結果発表方法

報告書を作成し、婦人関係資料シリーズの一つとして発行

岩手県下閉伊郡野田村

1. 村の概況

この村は都市近郊の農村とは非常に違つて、面積も広く小さい郡位ある。地理的条件が悪いため農業の経営形態も一般の農村と違い特殊の形で、従つて女の労働条件も違つて来ている。山間の村で耕作を主とし、交通の便が悪い東北型の農村である。

① 地理的条件がいかに悪いかは調査班がこの村に入るのに東北線の尻内から八戸線の久慈までまわり、久慈から普及までバスで二時間半、それから又炭を運搬するためのトラックで一時間半の行程、国鉄の沿道から一。里、定期給の交通がよいことによつても知る事ができる。もう一つの道路は東北線沿々内よりバスで五、六時間、岩手県に至り、岩手が牛乳のさく乳車で村の入口まで三時間、更にトラックで村の中に地へ行くというへんがは村である。荷物運搬は車で宮古市から二日に一べんの定期便を利用している。

地勢は南北、東西とも四里、高原状の北上山脈が海岸までつゞき、海岸は断崖絶壁のリアス式海岸であ

◎ 服装、靴、大でい洋服を着ているが非常に多くなつたもので困窮している家があらわれない。今の布地は、すきされて作業に適さないためもある。

この地方はシャーストから日本のチベットなどと言われて、そのついでに支村として実地視察されているが、現状は、農業経営の方式を暗に研究して変え、外資の状況に合わせようとして非常な努力をしている。本大田土地と未開拓の豊島村天谷資源をうまく利用すれば将来発展する余地を多分に持っている村であり、このことから見て、彼等に自信と勇気、希望を与えることが大切である。

2. 婦人の生活意識

生活意識の調査は各村とも約一。名の婦人を農家各帳より無作為に抽出して行つたがそのうちの主なもののについて報告する。

(1) 生活の改善

◎ 住生活について

この地方は群馬、山形などの村にくらべて一番暗く、その生活は暗に生きるためのものであり、住居等は設備が不充足で、生産に便利を求めという一つの目的のためにのみ出来ている。たとえば便所は肥料小屋をかねているので、この辺は、冬は非常に寒いにもかかわらず外にある。湯敷も、その水を肥料にするために外にある、一般にたつて住居はガラスがほとんど使われて暗い。

◎ 食生活について

主食はひえと粟と米と、三三三、三三三の割合に混ぜたものを常食としており、米は配給によつて食べられるようになったといふことである。このよう実情にありながら食生活の改善についての意見をきいてみると住居の面から、土足で料理をして、食事が出来るようにしたいといふことを少数がえつた他は、食生活の改善の事はほとんど考えられていない。

(2) 婦人の労働と家計の管理

◎ 婦人の労働について

各村一町乃至二町の畑を耕やしていて婦人が大抵これにあたりに、その管理をしている。しかしそれがそのまゝ、家族の毎日の食糧となり現金化されないのが婦人の労働は過小評価されている。搾乳も多く婦人がする。牛乳では飼料をさし引いて月約四千円位現金収入がある。日雇の賃金は男女の差が甚だしく、男子が二〇〇円、婦人が一〇〇円程度である。非常に貧乏な農家で婦人も炭焼に行くが、冬は普通婦人は針仕事をする。一日十三五時間労働しているが、労働的におきよめの気持ちからか苦しくも何とも言ひとまつていた。世間の休養は全然とらず、産後は家事は一〇日、畑は一月位休んでいる。

◎ 家計の管理

現金の管理は男の人が大抵やつており、男子の古い家でしうとめのある家は、しうとめが行い、嫁は全然関係していない。嫁に来て五六年は実家から人遣いをもらう習わしとなつてい

(3) 教育

教育は、若い人では特に学校が乏しい。村長や郵便局長等村の有力者の子、少しは町立の高等学校に行つて高等教育を受けているが一般に子供の教育やしつけについて何らかの方針を持つてい

(4) 娯楽、娯楽

新聞やラジオのある家が少いためもあるが、その人は殆どラジオを聞かず、新聞もよんでいない。それでも「家の光」や婦人雑誌等は比較的読まれている。娯楽についてはこのようなへんぴな村では生活に結びついたことしか知らなく、「どんなことか楽しめですか」と聞いても、「おいしい物を食べる」とか「子供を大きく育てたい」といふ答えが多かつた。しかし、娯楽をかつていふことは大人も子供も受けないことは充分うかがえる。

(5) 婦人団体

全村で一部落だけそれも海岸の部落にあるが、この婦人会は、二十二年に結成されたもので、割合に熱心に活動していたが、部落間の距離が一、二里も隔れているためにこの活動はほとんど他の部落には及ぼされてはいない。

(6) 娯楽、娯楽

娯楽、娯楽、肉類、娯楽、娯楽等の娯楽協同組合があるが、資金難のため、個人が能力を發揮している人に常に押されがちなものであつて、その活動は不活発であり、娯楽に対する婦人達の関心

可憐なものである。

(7) 政治や法律についての関心

調査した婦人の半分が素直にいたがこれは投票前が重たいことも原因であるが、政治意識の低いことが根本にあげられると思う。しかし投票した人は一応自分で考えて投票したと答えている。婦人についての法律に關しては殆どが知っていない。

この様に文化方面に於ける婦人の意識が低いということは、結婚、村全体が疲弊していて通勞におちいり、男世帯、心身共に余裕がないためであらう。又、交通の便が悪いということも文化のおくれる大きな原因である。それゆえに村民自身の研究努力に呼応して外部からのいろいろの援助が必要であると思う。面談してみても一度つとめたことがあり、世間の風にあぐらをかきこのある世の人は意識も比較的高いので、やはり社会に出ることの必要を感じた。又開拓地は、生活は食いが天婦羅位で家庭が明るかつた。

三 山形県東田川郡大和村

村の概況

○ 東北の耕作地帯の村として選定されたこの村は、庄内平野の一角にあり、村の中央を庄内川が横切り、東端に最上川が流れている。村に入つてまず目につくのは耕地整理がよく行われていて、手入れのよい畑があることであるが、この村には最上川の上流の清川村方面から引いた大きな北橋大堰があり、また明治末期には多田堰ができてそれ以来土地が豊饒した。

耕地整理は明治から大正にかけて大々的に行われた。それは年々最上川の氾濫のために耕地がとられ、恐ろしくならされていた建設、又新田の開墾で荒れ地、沼地、畑地を改良して田にし、これをきつかけてとして耕地整理を行つたのであるが、当時土地一畝が百円で、その金を出すことができず、大地主に金を借りて土地を獲得した者もあつたようである。地主の支配力がこの時代から次第にのびて行つた。

この村は中部関東にくらべて大きな耕作面積をもち、一戸平均二町内外で、畑は多く、田が圧倒的に多い。農地改革以前には三町歩以上の所有者が多く古岡部落では四ニテ中百町歩近くも持つていた地主もポツポツあり、その反面土地を丹に耕かつた者が四割程いた。連夜部落は古岡と異り、大きな地主はごく一町内外の小作人が多い。

地主と小作人との関係は連夜と古岡では随分ちがつていて、古岡では月耕、奥山を中心とする二つの基があつて相方の板刀をもち、何事も一手に引さうけていたようである。連夜の書き入れや小作米の取り上げは分家が近い、分家のない所では支配人が行い、分家ばかりに取られ、これら古岡のイモチ（分家）は明治以後に多くがたが、これらは所有面積は多く、日耕その他で暮らしている。

連夜部落では村外地主や支配人が板刀をもつていて、機嫌をよこねると土地をとられたりや如何に小作人の社会的地位が低かつたかを知ることができるといふ。しかしこのように地主の板刀を農地改革以後は地に落ちた感がある。

○ 婦人の労働。この地方は一体に米の一毛作で、春から秋まで半坪の間に比較的大きな面積を耕作しなければならぬので労働量下日数が多い。つまつていては、労働が強烈で、殊に農繁期には大きくひびき、自家の管内労働力では間に合わないのでも主人を入れてある者が多い一方土地を耕さない小作人の家などでは男も女も労働と成つて他の家に住み込んで、近い所では通つたりしている。婦人の労働はほとんど男と同じで、農繁期は非常に忙しかつた。十一月頃から外の仕事はほとんどできなくなるので婦人は漬物、つくろい切手をやる。又富士から肥料を入れて花むしるを織るが、これが農閑期の大きな収入と成っている。

村の總戸数六九八戸、人口は四、三三八人で一戸平均六人であるが、大正末期には七人位であつた。この村は東北の特性をあらわして一戸に家族人数が多く、特にくわしく調べた古岡部落の例をみて一戸平均六人、内親戚世帯は一人、子供一五人その親子の配属も、常備員と成る、今回の調査の一つである愛知県の春日村より一人たらずの増加になつてゐる。

家族のなかでは、父はトト、又は金々、母はナナ又はカカ、祖父をジサン、ジシ、祖母をバサン、バ

2. 婦人の生活意識

(1) 生活の改善

① 住生活について

住居は大抵の家が木造で、音かき見や蚊がすじつていた。半井は雪にかこまれている地帯なので屋根の勾配は急で、家の中は暗い感じであった。敷地は台所のすみにある炊事用のいろりやみかからでなく、みかまやいばをしい、煙突はほとんどない。

家の中に押し入れがあり、その間が台所となっていて炊事用のいろりや流しがある。大抵はこの家で流しのわきに風呂がおりてあり、炊事用の流しのわきで体を洗うようになっている。

台所の改善について何か意見はないかと聞いてみると煙突をつけたいという人は多く、ガスや電気を使えたらよいと思うと答える者が予想以上に多かった。これはこの地方では大抵の家が電力作業機を持っており、農業の電化が進んでいるためと述べた。

燃料は部落の共有林があり、さめた日に薪をとりに行くが、そのほか、最上川から拾ってくるとか、一斗中もみ殻をたたくとか、燃えるものは何でもやすほど、燃料には不自由らしく、これについての意見は否決であった。

流しについては、流しを風呂からわけをいとは、衛生的とはいえないなどの意見が割に多かった。又家についてでは窓を大きくして明るくしたいとか、客間が奥にあるため居間を通って行かなければならないから廊下をつけたいなど生活に關してはいろ／＼の意見をさくことができた。

② 食生活について

食生活について何等かの改善希望を述べた者は有者中五十八名であったが、そのうち飯をもつと食べないとか、野菜でも細いために味がよい、肉はとるが多かつた、食器を三日に一度くらいしか洗

わがないから毎日洗った方がよい（しかしそれも忙しいのでなかなかできぬ）と答える者はたつた一人であつた。

改善についての希望を述べた者のほかには「自分は今は満足だから」といふ意見もあつた。と答える者もいた。

(2) 婦人の労働と家計の管理

① 婦人の労働について

この地方は雪の降く半井の間は男もせいぜい非耕に忙しいが、仕事はつらいかどうかをきいてみると約半数以上がつらいと答えているが、なかには雪日の二、三日から慣れればつらくないとか楽しんでるものだと答える者が少数いる。

仕事をもつと繁にすることはどうしたかといふと、竹藪をふやすとか、磯藪や牛馬を使用すればよいと答える者が一番多いが、農村の労働はあたりまえだから苦にしないとか、一生けんめい働くのは一家円満のもとだと答える者が有者中一五をもちいた。協同化については共同作業はだめだと答える者が絶対多数で自分の家だけでやるのが一番よいと言っている。

② 家計の管理

家計の管理はほとんど男の人がしているが、それについていろいろ不満も抱かず、このまゝでいいと答える者が多かつた。

(3)

④ 健康、娯楽

娯楽、映画なども見に行く人はほとんどない。公民館に映画がきたときたまに行く程度である。ラジオは

大抵の家にある。だのしめは何かといいてみると、「実家に帰ること」とか「子供が大きくなつて嫁でももらう」といふのが一番多かつた。

5) 婦人団体

この村は戦時中に此上階級の専らに婦人会の幹部はなつて働いていたが、終戦と同時に引退し、そのあと三年も誰か会長になる者がまらなかつたといふことである。

現在、大和村婦人会があるが、一般に婦人の関心はあまりなく、婦人団体の活動は活発ではない。

(6) 農協組について

昭和二十三年三月に設立された大和村農業協同組合があり、組合員数は一六二名いるが、農協組についての婦人の関心はうすく、婦人でも組合員になれるかといふ点に對して「それはいい」とか「知らない」とわからないうなど答えた者は調査対象となつた百名の婦人のうち四〇名であつた。

(7) 政治や法律についての関心

婦人の投票率はわりによく八割以上となつてゐるが、この村は衆山三六氏の出身地なのでみづよく投票したのであらう。このようにして人をきめたかといひてみるとラジオや新聞などによつて自分でもめたと答えた者は投票した者九四名中二一名であるが、あとは、天や家人の言葉に従つたとか（一七名）、土地の人がよいと思つて入れた（一五名）などという者が多かつた。

法律についての関心はうすく「新しい法律でせいの立場がどう変わったか」をきいてもそれについて知つていた者は三九名であつた。知らない者が多かつた。答へがなかつた者であつた。知つていた者のなかでも婦人参加権や男女同权などについて答えた者が多く、同姓家族のかさなりも多く、家の廃止が今後利当の影響を及ぼすであらうと思われ、このようだが、「家の廃止」について言及した婦人は僅か二名であつた。

この村は戦地改革以後だん／＼変りつゝあると思われるが、婦人の生活はあまり変つてはいないやうで、家に對する気持がまだ強く残つてゐるやうに思われる。

三 群馬県北甘樂郡後藤村

村の概況

この村は養蚕地帯の村として選ばれたのであるが、東京からは約半日の行程であり、また日本最初の製糸工場のできた高岡からバスで約三〇分、後葉の中心地である前利、利生村とへは一時雨ほどで行けるところにある。東西に長く東半分は水田地帯であり、西半分は山が多い。東西を横切つて一本道にバスが走つてゐる。人口は約六〇〇人、二十名の小字に分れ、東半分は面積が広く家は散らばつてゐる。村は平たんで他で距離単位を交通、連絡にはそんなに不便でない。道路もよく、隣村との交通も便利で従つて通商の地味もない。

産業概況

東半分は水田、養蚕で西半分は畑作、養蚕が主で、畑は二毛作が行われている。収入の面からいふと養蚕と表が主なものとなつてゐる。

養蚕については、最初は自分足程度で養蚕をして買換を續つていたが開港の始め頃、村の中にマリア・ア・ク・ア式の工場を経営したので村の娘や婦人の仕事となつてゐて、それが細く出ることはあまりなかつた。嫁入りの一つの條件として嫁織りの技術を必要とした。此の村は早くから貨幣経済の渦の中にまきこまれ幾度かよい時は現金収入も多く、生活程度も多少に影響された。

婦人の労働

前に述べた通り、この村は養蚕が主であつたので、婦人はあまり畑にはおぼつかつたが昭和の始めの頃の値下りや、戦時中、食糧増産のため桑根をぬき畑作にしまつたのでその畑作の仕事がふえた。桑根は、買ましの為に一時的にうるものだが、それは幾分かあつた。最近生糸輸出の好転で桑畑に又入りつゝあり、女も養蚕の仕事に戻つてゆく様子である。

経済概況

村の経済程度は東北地方にくらべると高いやうである。雇人は、かわらぬ者が多く、自給自足の村である。大体、米麦を消費してゐる。秋の雨としては不期そのに困つてゐる。

2. 婦人の生活意識

意識調査の中婦人少年局の局長が担当した八四名についてどんな感想があったかを述べる。

(1) 生活の改善

① 住生活について

これについて何も考えていない人が二十名を占めた。我々入り部活は水が不自由部活だったので、部活全体に水道が引かれ、それに続いて台所を改善した家も相当ある。他部活の婦人も我々入り部活の事をうらやましがついているが、自分の家を何とかして改善しようという積極性は見られない。いまだに迷信のために新築を見合せて不便をしのんでいる者もある。住居の改善は、おかし、井戸が台所はかまふことだ。井戸に関係したものが多かつた。煮炊きの設備は各はいろいろ、夏はかまふことだ。かまふに煙突のある家は少ないのに、つけたといつた人は三、四人しかいなかった。仕事に便利のためというので、煙を流して家の上から食事の出来をうまくしたいといふものも少しある。便所のことについても改善したいといふ人五人位しかいなかったが大部分は外にあり、不完全是、汚くて、不便であつた。風呂場は別荘で不便だが改善を求めている人が少なかった。家が本々から狭くして便利に家を改造したいという意見もあつた。その他、窓をつけたい、ガラスをつけて明るくしたい、花など飾るところを作りたい等、積極的意見は述べた者が少数あつたが、全体としては積極的改善意識は少ない。

② 食生活について

主食は米で、さりとてみへつとん、おやき等の新食が相当行われていて、山芋の米を作っているところでは湯食の方が多いうである。副食はその土地に盛れる野菜が多く、しんじょうしいが改善を求めている者が多く五、六以上もあり、その中には小人数ばかりに手をかけてやつていいるという者もあつたが大部分は経済的に出来ないという考えであさる。中には別に病人も求平大天ばかり特に栄養について考える必要はないとして現状に満足している者もある。改善を求めている者三、四名の中では魚や油が欲しいという者が多く、農家にも油の配給をしてほしいという声が大分聞かれた。

(2) 婦人の労働と家計の管理

① 婦人の労働について

養蚕の村で婦人は大抵部活と養蚕に従事しているが、仕事はつらいかと聞くと半数以上が、どちらでもないと答へ、銀だという者が八名あつた。つらいといつた者が二八名、非常につらいといつた者が四名いたが、その解決策について聞くと、人手を小やせはよいといふ、機械化や畜力化、電氣化を求めたり農具、衣服をへらせばよいとか、現金をえとられなければよいという消極的意見が多かつた。協同化は殆ど反対で、それ、徳があるからと云つていた。雇後の休養は農作業は三週間——一月位で、家事はもつと早くからやつている。農閑期であるとは三、四月間に過ぎないが、この時期に金産した場合は、雇後の休養が養蚕期より多くとれる。月経期の農作業等は、皆休まふ仕方がないと思つてい

② 家計の管理

養蚕についての相談を夫から受けていない者は三、四人程いたが、相談を受けている者も自分から意見をいう者は殆どないようである。家計の管理も全体的には殆ど男の人がやつていて、日帯の金も婦人が扱つていいる例も相当に多かつたがそれに対して不満もあまり聞かぬかつた。嫁が扱つていいる例もあるが、

子供のことについて特別何も考えていない家庭が相当に多い。その理由としては「百姓だから別に考える事もない」「おかし、いからかやつていられぬい」というようなことがあげられている。「健康に気をつける」「悪い事をしないように」「子供をよくするようい」というような意見が多く、積極的な教育方針というものはあまり聞かれなかつた。

(4) 娯楽、娯楽

何が楽しいかという問に対して「映画を見に行くこと」と答へた者が若い層の中に少数あつたが、子供を持つていいる者は「子供の成長が楽しい」といふのが最も多く、お嫁さんは「家内に客に行くこと」が

楽しみだ」というのが多い。その他には「大天で家内業がよく暮すことしや」感が体まるから初日が楽しみだ」というのが多く、「何と楽しみは古い」と答える者もかなりあつた。歌謡は少数の若い人の他は殆ど見ていない。

(5) 新聞は大部分の者がとつてゐるが、女の人で毎日よむ人は少数にたつた。時々読む者が最も多く、老年層では殆ど読まないと云つてゐる。

ラジオは古い家がかなりあるが、ひいてある家ではその人も毎日聞いている人が多い。「目か壊れるから」とか「文字がよく読めないから」とかの理由で新聞を讀んでいない老年の人もラジオは聞いているようである。娯楽番組が多いと思われるが、

本や雑誌をよんでいる者は少数で、読まない者の中には暇がほしいといつてゐる者もあるが、全然あきらめてゐる者や、そういう暇があつたにわづらひないといふ者もあつた。

(5) 婦人団体

昔の婦人参加度のものでしるべく、評語だけの動きとなり一般の関心はうすい。

(6) 農協指導者が非常に熱心なので運営もうまく行つてゐる模様で、一般の関心も相当に高いようであつた。

(7) 政治に対する関心

今年の参議院選挙では村全体で衆議院が三人という母成であつた。その前の衆議院議員の選挙の時村に立候補者があつたが、殆ど村を挙げて応援したのでそれ以来選挙に対する関心が高まつたという話であつた。

(8) 法律についての関心。法律年には暗く、戦後改正されたといふことを知つてゐるだけで、その内容については殆ど答へられなかつた。

最後に、印象としては、私の見たところでは愛知や岡山より暗く、豊かでないが、女の人々は、全体的にはきはきしてゐてよく答へた。事例調査の中の家計の概要については群衆が一層積極的に話してくれたいと思つた。

四 愛知縣西春日井郡春日村

1. 村の概況

春日村は名古屋からバスで二十五分。全体的印象は濃美平和の農業地帯にふさわしい明るい農村であつた。戸数五五七戸の中四百戸が農家であり、殆ど五反以上の蔬菜畑を有している。出荷の量大を占めるのは秋大根でこの村の北端にある宮重部落の名をとって宮重大根とも云う。この村の中央を五條川が流れてゐるがこの川は一名宮田用水とも云われてゐる。五條川の東側の下之郷部落は田が多く西側の宮重部落は畑が多い。春日村は明治二十一年の市町村制度が出来ない中では合併村と云つた。

そして村長、助役、収入役の三役は宮重部落と文藝でその配分ついた。蔵地解放までは五反以下が五五%、大五%で大地主があつたが今でも、じょうや(地主)が顔役となつてゐる。この村の役場の人は村長助役を始めじょうやの子弟が順次に上にあがつていく様であつた。

下の解について云へば田は全部二毛作で表作には米を裏作には麦を作つてゐる。

畑も裏作は麦を作るが、表作は蔬菜であつた。その他、木、ホーレン草、筍を作る、落合では始め南瓜、次に大根を作る。春日村においては男女の労働は余り差がない。山村では長い冬眠の期間があつたが、ここでは冬休みもない、又山村ほどこの家にも電力の配線、もみすり機を一台づつ持つてゐるが愛知にはこうした機械もなく役所もないので植つたの時は一番つらい様である北しい時は日傭によつて少し人手をふやしてゐるらしい。

上の解は地主の性格は余り強くないが下の解は幾分出てゐる様であつた。本屋新屋の別はないが組の組織が非常に強い。この組はお組組とも云つて、葬式は勿論親戚、遠近の命日やその他、月二度位お講をやる日や生治に大きな影響を及ぼしてゐる。

五條川を中心には各部落が別れてゐるが、川の堤の管理は小さいのは部落でやり、大きい五條川全体の管理は、伊予川と云つて代々在籍的にやつてゐる古くからの、じょうやである。山本の頭家がそれに當つてゐる。

この村の現金収入は蔬菜類の販売である。昭和二十一—二十五年頃までは非特収入があつたが、その現金は離れを建てるとか結婚のための費用に注ぎこむとか、若い者は背広を二三着新調するとか云つた具合で使つて終つた。今日では徐々に結婚のための道具も揃えて来て男子であるといふと自転車は是非もつていかなければならぬらしい。持つていくものが少いと離婚の原因になる。又働きが少いと離婚の原因になるらしい。

組の組織は若衆連中、成母、老母の三役者に分れていてその組は終生続け合つていく、元服の儀式は五條川の面、落合野巻には多少今日でも残つてゐる。

家族の人数は平均五—六人。男女を比較してみると子供でも女子が少い。これは女子が結婚して早く家を出るためかと思われる。愛知では昔のやうな山形より少ないが、予想より上廻つていた。

2. 婦人の生活意識

(1) 生活の改善

⑤ 住生活について

この村の家は、殆んど全部瓦屋根で建築がしつかりしており本屋、左に別屋、右に納屋の配置で門近くは井戸のあるかまど等大体同じであつた。この様な住居に生活する婦人たちは住居についてどのような意見を持つてゐるかをきいてみると

A. 煮炊きの場所については
煮炊はほとんど全部かまどを使つてゐる、かまどはくどと云い煙突が大部分ついてゐる、かまどについては、過半数の人はたきもの、関係でこのまゝで良いという意見である。麦から、わら餅をもちやしてゐる。少数の人がガス、電気の使用希望をもつてゐた。

B. 台所の改善について
四割の人は別に意見がないといつてゐる。残りの人は大体井戸を家の中にとり、かまどに近いかへとか、井戸屋根がほしいとか、井戸を中心にした台所の改善を述べてゐた。又少数意見だが、台所を明るくしたい、井戸をモーターでくみ上げ、水道の様にしたいといふべつてゐる。他方、現状のまゝで満足といふべつてゐる人もあつた。

C. 住宅について

さらに住居全体の改善についてきいてみると殆ど割の人が意見を述べてゐない。この中には住居の改善は経済問題とからんで来るから思つてゐるだけや、あきらめて何とも思はないという意味のものも数多くふくまれている。又一応住居がしつかりと出来てゐるの意見がない者もあつたと思つた。その他意見はまちまちで、今のまゝで満足なとか、明るくしたい、清潔にしたい、広さなどから小部屋にして数を多くしたいとか、はなれがほしいとか、さまざまで、その中で少数の人が自分の室をもちたいという希望をもち自分自身の生活がある程度考へてゐる面もみられた。又子供の勉強部屋を希望する人もいた。

⑥ 食生活について

「毎日の食事についてどうしたらよいとお気づきの事がありますか」という問いに大割の人が無関心で気が付いた事はないと答へた。中には野菜だけでなく、たまには肉や魚が食べたいと云うものや、油を使ふこと、バターの供給を希望するものもあり、此しので色々考えを問合がないのでと答へる人もいた。それと前日の日は食物にしても栄養のものも考えるといつてゐる。かつてゐる鶏の卵は家で食べるより商品として出している。

(2) 婦人の労働と家計の管理

⑦ 婦人の労働

この村の調査対象者の八割は毎日農業労働に従事し家業の仕事もしゆうとめのない家では主婦が万事をうけてゐる。それと多くの婦人は専任であるが

A. 「仕事がつらいと思ひますか」という問いに対し、相当つらいと意識するものは百人中九人、その他はつらくないとか、どちらでもないと答へてゐる

B. 「仕事を減らすにはどうしたらよいのかの問いに対しては積極的な入札はなかつた、男の人の一層の力をまつとか人手がほしいとか畑を二つの場所にあつめたいなどという意見があつた。

C. 協同化については蔬菜作りばかり他人と共同でするのはむずかしい、協同では欲がなくなり収入が

少くなる。又仕事を長くやらぬ諸大伴及対が考へた。

D. 産前産後の休業については、産前は殆んど休まず、産後は家事の仕事に三日——一週間からはじめ、農務は勿論お休まり初め三日過ぎるといふものがあつたがなほには産後一週間から初くと云ふつな者もある。月経時は勿論休まず、休みたいと思ふ者もあるが百姓は仕方がないと述べている。

③ 家計の管理

大きなものは主人又は息子、小さい金は家内中の誰とでもきまつていないとか、しゆうとめが元氣なときはいしゆうとめが管理すると答へた者が多く、自分が管理するといふものはわりは少なかつた。

(3) 子供のしつけ

主に母親がする、「どの笑を氣をつけるか」に對して他家の親のものを取らない様にと答へたのが数軒あり、教育熱心について一貫した意見をもち家は余りなかつた。

(4) 教養娯楽

新聞をよくよむ人はまれ。四十過ぎると目が悪くなるらしい。みる人もみだし程度であると答へている。ラジオは大抵の家があり、夜は聞いているが仕事をするのが遅いので録音放送などはあまりきけないといふことである。

読書——読む人約一割。それも時々よむ程度
娯楽——別に何もないと答へるものが約二〇%。嫁を取り孫の顔がみない、造花、裁縫、おまつり、盆、正月、うまいものをたべる事等いろいろの意見があつたが、子供の成長を案じみだしというのがやはり一番多いようであつた。

今年になつて映画に行つたといふのは若い二十台のものが多く、年寄は少ない状態である。

(5) 婦人団体

婦人団体はまだないが小学校の女の校長がもと縣社会教育局にいた人で婦人の教育に熱心で社会学級を月二回ほど開き部落代表の婦人に對して講演会等をやつてゐる。今度調査は始めての事として婦人層は二つ

ため刺戟されたので今度は婦人会が結成されたかも知れない。社会学級の他には大谷法政婦人会という、お説教を聞く会があり会のおと各自もちよりでどこを何をして食べたいしみにしている。しかしこれは佛教的集りで娯楽の力はあまりない。(備考、この村には十月一日婦人会が結成されたといふ知らせがあつた。)

各部落毎に青年団があつて一日と十五日の両日は野良に出てはならない、休いてはならないという打合せを作り村全体の休日としている。この日は野良に出るものは三百円の罰金を取る事にしたので今日はこの日は家の中で出来る仕事に努める人が多くなつた、婦人もこの日は野良に出なくてすむので体は多少楽になつたようだが家庭の仕事があるのではなかつた。休養はできないようである。

(6) 農協活動

村に近く大きな濱州町があり、こゝに何でもあるので農協の仕事は押されざみである。農協への希望は大體なし。農協に對して批判を加へる人は少い。

(7) 政治について

選挙については大體自分の判断で農民のためになる人を入れたと答へている。投票状態は良い様である。法律の知識の程度をみると約八割が知らない。知つてゐる者も男女同权和か、参政权が手えられた事を知つてゐる程度である。

面白いのは、離婚の時の財産分与は知つてゐる。これはラジオ、新聞等によりよく普及された事と婦人達が身近な問題として記憶したためであらう。

五 岡山縣 瀬郷 常盤村

1. 村の概況

米作を主とする二毛作地帯で集約的農業を営んでゐるところとして選定されたこの村は縣の南部にあり総社町に隣接してゐる。岡山市から吉備線で約一時間、倉敷から伯備線で約二十分の距離にある西総社駅は

總社町の常盤村であるので、交通不便な山間の農村に比べると、ずつと都会化している。

愛知県は群馬県より暖かい印象をうけたが、この村は愛知よりも更に村全体が暖かい感じであつた。

村の西端を高梁川が流れ、川から引いた用水溝が村の中を縦横に流れて田畑をうるおしている。土地の総面積は五五五平方メートルで、部落は大字三輪（上三輪、下三輪）溝口、奥野（奥野、下村、石原、八神）中原（上中原、下中原）に分れていて、母数は大凡九戸、人口は三、四八二人で、一戸当りの人員は五人弱である。

農業を営む母数は四八七名で、そのうち農業を営む母数は三二四名で、兼業農家が一大三母数となつてゐる。農地改革による売渡面積は田畑合せて一八〇町五反で、山形のように百町歩近くも所有していたという大地主はなかった。経営規模を見ると五反から一町未満の農家が最も多く全体の半数近くを占めていて水田が多いが、中原部落はほとんど畑で蔬菜を主に作つてゐる。農産物の作付面積は米、小麦、豆類、甘藷、馬鈴薯、大麥の順になつてゐるが、特産品として蕎麥がある。

機械化、電力化は着手、群馬、愛知の調査村から見ると相当進んでいる。乳牛をかなり飼育してゐて農機で牛乳処理場を経営しており、自家用としても相当消費してゐるのでよい栄養源となつてゐる。

その他、鶏羊、山羊、豚などを飼養してゐる家もあり、農閑期の婦人の仕事として麦稈焼田、草津、薪などの農産加工品製造がある。

2. 婦人の生活意識

(1) 生活の改善

無作為に抽出した調査対象百名のうち、中等学校以上を出た者が三分の一位あり、五つの調査村の中で最も教育程度が高く、経済的にも比較的恵まれてゐるので、今まで調査に當つた村の婦人から見ると、生活改善に対する意識が強いという感じをうけた。

◎ 住生活について

家は大抵瓦ぶきであるが、たまに見受けられる藁ぶき屋根はカツオ木のついた神社風のつくりで、関東地方には見られない特徴がある。多くの家が表の土間と裏の土間との間に仕切りがあつて椅子など置つてあり、群馬あたりの普通の農家のように台所まで見通しというような事はない。

煮炊きはほとんど煙突のついた釜を使つてゐるが、薪をかけて煮つけられるように高く作つてあるものが多い。釜などの事をくどいというが、もみかみを燃料にする、すくもくどい、おがくすを燃料にするおがくどを併用してゐる家が多い。中には、さくらかまどという改良かまどを使つてゐる家もある。改善の意欲をもつてゐる者が相違なく、電気、ガス普及のそとよいという看もかなりあつた。「都庁で自由に使へる電気やガスが農村では使えないというのは不合理だ」と思う、もつと都市と農村の生活を近づけたい」という都会生活の経験者もあつた。

◎ 食生活について

飼育してゐる乳牛の乳や、にわとりや鶏などの卵など自家用としても相當に使つており、農村としては食生活も豊かな方である。

改善したいという者が半数位あつたが、改善を求めている者のうち、すでに牛乳や、卵、魚、肉、油など使つて營養や嗜好について充分考へてゐる者が相當に多い。

栄養指導にはなつてゐる消費村と隣接してゐるので刺激される面もあるかと思われる。

(2) 婦人の労働と家計の管理

◎ 婦人の労働について

仕事を早いと思ふかという問に対して、相當に、或は非常に「辛い」と答へた者は三〇名程で、あとは「どちらでもない」、「まあ楽だ」、或は「楽だ」と答へてゐる。

しかし女の仕事を楽にする方法については、別に辛くないといつた者も色々答へてゐて、農業を機械化するという答が一巻多く一三名で、その他、家事も男性に手伝つてもらつて、台所の改善をする、託児所があればよい、女をふやすといふ、農業をやめなければ楽になるなど、色々の意見が聞かれたが、百姓は忙しかつたが、女をふやすといふと答へた者が五名あつた。

農業の協同化に対しては賛成者二七名、反対者六名で反対意見としては意見が合はなかつてうまくいかない、却つて仕事がかばらない場合もある、協同化にすれば楽でないやというものがあつた。

② 家計の管理

全体的な管理は専業主である男子がしている家が多いが、大八名であつたが、私がしていると答えた者も一〇名程あり、夫婦或は子供を除いた家族全部でしているという者が一一名あつた事が目についた。日帯の金の出し入れは、夫と答えた者が最も多く四〇名余りで、未婚者の場合は多く母と答えている。夫婦、姑と嫁、或は一家中でしているというところもかなりあり、専業主だけが持つている家は極く少数であるが、調査対象が嫁の場合には姑がしていると答えた者が一〇名余りあつた。

現状に対しては、このまゝでよいと考へている者が多いようである。

(3) 子供のしつけについては全然考へていない者は割合に少く、八〇名位が色々の方針をのべているが、行儀よくとか、言葉づかいに気をつけるなど、礼儀に關するものが目立つて多かった。

(4) 教養、娯楽

中年以上の婦人は、芝居や映画などあまり見に行つていない。新聞やラジオは大抵の家にはあり、本や雑誌を讀む者も大五名あつた。讀まない者は多くは暇がないと答えている。

どんな事を樂しむかという問に対しては他の某同様生活的なものが多く「子供の成長」と答えた者が第一位で、その他は「洋服を縫う事」、「一家だんらん」、「生物を飼う事」、「祭、盆、正月の休み」、「実家へ帰る事」、「読書」など色々であつた。

(5) 婦人団体

大正十年、會員二〇〇名の常盤村婦人会が組織され、教養、生活の向上などにつとめたが、昭和十二年國府婦人会、十七年大日本婦人会に吸収された。

戦後は廿一年三月再び常盤村婦人会が組織され大正十年の創立者であり、大日本婦人会時代の会長でもあつた人が現在でも会長をしている。

各部落毎に支部長、幹事をおいて、農閑期には法律、衛生、生活改善などの講演会や、料理、洋裁、英語の講習会など開いているが、一般會員の中にはあまり関心をもつていない者もある。

(6) 農協組について

全体に農協組に対する婦人の関心はうすく、婦人も組合員として加入できるといふ事を調査対象者百名のうち約三分の一が知らなかつた。

又農協がどういふ事をしているかという事も四〇名の婦人が答へられなかつた。

(7) 政治や法律についての関心

六月の参議院議員の選挙状態を見ると、八五名のうち七三名が投票して一〇〇名のうち一一名は選挙権がなかつた一〇のようにして送んだ分を聞いて見ると、そのうちの三五名は自分できめたと答へており、主人と相談してきめたとする者は一三名、何も考へず皆のいう通りきめたとする者が五名であつた。農村の事を考へてくれる人を選んだ者八名、政党を選んだ者五名、婦人を選んだ者二名となつてい

る。法律についての認識の程度は、他の四県に比較するとずっと高く、七一名が新しい法律で女の立場が変つた事を一志知つていた。

法律が変つたために、この村で女の立場がよくなつたかという問に対して、よくなつたと答えた者は三〇名で、実生活の上ではやはり変化は少いようである。

◇穀倉地帯の件島郡白町でこのほど婦人少年局職員を中心に男女約百名が集り、農村婦人生活の実態を語る懇談会を開いた。以下は主な意見――

◇婦人労働は増加した。白河平野では人糞肥料が流通したため十二三年前から農作をやるようになり、特に戦時中から引続き行われている為、肥料が婦人の仕事だと思ひ込まれてしまった結果、平均男子の一日労働時間約十時間に對し、婦人は家事や育児に約四時間半、農事に八時間、計十二時間半を男子より三時間半も働いていることになる。

◇これは土地改良と経営方法の改善で解決するばかりない。土地改良では農地の交換分合を徹底

的に行わねばならないが、よく分つていながら実現しないのは有識者の意見が消極的だから。また経営方法では牛馬糞の利用が第一だが、この二帯が畑田で畜力利用ができないので牛馬に改めなければならぬ。

◇昔の人は夕方になるとほとんど

欲しい男性の理解

――農村婦人は叫ぶ――

どろどろやカヤを屋内で作っていたが、農作をやるようになったから農外仕事ばかりで新聞を読めぬといふらしい。婦人が壁の上についているとすぐ、急いでいふとシユウトにしかかれ、義理と礼を欲する。またこれに理解を持たないと婦人病が多くなるばかり。

でなくてはならない。公民館の利用をもっと盛んにして、婦人の生活館」といつた通り所にしてほしい。

◇結婚難は徹底的に切りつめてせい、一家の月収以下で辛抱すべきだ。派手な方方がまた昔に返り咲きという感じ。

◇同屯屯士指導員が多くて疲れ方が早く労働にひどく影響している。無料診療所を設けてもらい、農家の人が積極的に診療を後援に出かけなければならぬ。二万、みんなの協力で改良便所などを一せいに実施しよう。

◇妊娠はミシンやわかないなどの作業をつとめて避け、周囲もまたこれに理解を持たないと婦人病が多くなるばかり。

労働省婦人少年局佐賀職員室

主任秀島はつ子